

日本語の存在論的「にーが」構文

趙 蓉

1. 本研究の目的

日本語の文構造「にーが」構文は、(1)～(5)で示すように、存在文、自発文、可能文などいろいろな意味構造に使われる。それらの文は、それぞれ独立した存在を表すものであり、何も不思議に思われなくても知れない。しかし、言語の形は裏にある人間の認知能力、主体の経験によるものである。つまり、この多様な意味構造があることには、理由があるはずである。それは一体なぜか。本研究では、認知言語学と意味論の立場から、この多様な「にーが」構文の内部の関連性、文頭の二格と後続部分の関係について考察する。

- (1) 机の上に花瓶がある。(存在文)
- (2) 代助には此社会が今全然暗黒に見えた。(自発文)
- (3) 私には彼が親切すぎる。(主観的判断文)
- (4) 私には彼が来るのがうれしい。(感情文)
- (5) 私には彼の汚い字が読めた。(可能文)

2. 先行研究

先行研究には、本研究と同じ視点からの研究はまだない。ただし、関連する研究は数多くある。以下は関連研究の一部をまとめたものである。

Langacker(1991)は人間の認知活動における「場」と「参与者」の概念を提出した。「場」とはステージに相当するさまざまな事物が存在する変化しない外部領域で、「参与者」とはその「場」において動き回り、互いに関わり合うサイズの小さいモノである。

Langacker (1999)(2001)は人間の参照点能力からsubject, topic, possessorを統一的に議論し、さらにその参照点能力は更なる広い範囲で応用されていると主張している。この理論は「にーが」構文の研究だけでなく、日本語の文頭表現、ひいては、現在でも激しく議論されている中国の主語主題問題に対しても、非常に有益な提言であると思う。

池上(1991)(2000)は、英語は動作性が強く、「する」的な言語であるのに対し、日本語は「なる」的な言語であると主張している。

尾上(1998)(1998-1999)(2004)の出来文、二重主語文の研究は「にーが」構文の研究にも大きく関わっていると思われる。

森山(2004b)は二格の研究によって一部のプロセス

が主観的把握によって存在として捉えられていると論じている。

益岡(2000)では「二格+ガ格+述語(動詞)」という構文」という呼び方で、主としてその構文における「二格」の意味役割を論じている。

熊代(2002)は「にーが」構文という概念を提出し、さらにそれを存在文、適用文、所有文、評価文、可能文、主観的判断文、「いる」所有文に分けて説明している。その上で、日本語は一つの事物が、ある関係(relation)に参加し、さらにそれが別の関係に参加する階層的連関(layered interrelation)を好むと主張している。また、『「にーが」という格パターンを持ったすべての文が何らかの形で「場—参与者構文」を表している』とも論じている。

3. 本研究の「に」と「にーが」構文

3.1. 二格のスキーマと二面性

二格の意味用法に関する研究は数多い。ここでは、森山(2003)(2004)の観点をまとめる。これらの論文は認知言語学の観点から、二格用法のプロトタイプは「彼に手紙を送る」といった与格の用法であり、二格の用法すべてが共有するスキーマは「ガ格に対する対峙性(独立性)」であるとしている。プロトタイプが与格か、位格かの結論は簡単には出せないが、「ガ格に対する対峙性(独立性)」というスキーマには私は賛成である。

さらに、二格を二分し、移動の場合、ガ格は源泉領域の能動参与者で、二格は目標領域の能動参与者であるとしている。存在場所と経験主体の場合、ガ格は図で、二格は地である。

3.2. 本研究の「にーが」構文の種類

本研究が対象とする文は、初めに述べたとおり、存在文、可能文、自発文、主観的判断文、感情文であるが、そのほかに、次のような文も含む。現在の段階では9種類としている。

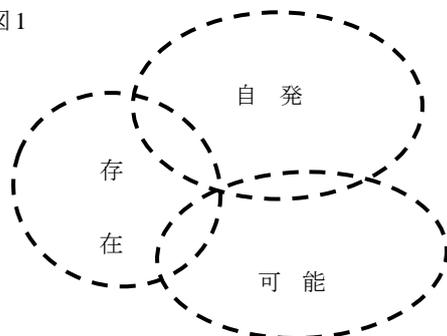
- (6) そこに鳶がとまっている。(存在様態文)
- (7) あそこに新しいビルができた。(存在変化文)
- (8) 口元に微笑が見える。(視聴覚顕存在文)
- (9) 私には子供がいる。(所有文)

本発表では、存在文、自発文、可能文の関係と「にーが」構文と二重主語文の文頭の異同について発表し

ように思う。

4. 存在文と自発文と可能文の関係

図1



ア. 三つの楕円の重なるところには「見える」、「聞こえる」のような動詞が当てはまる。

イ. 自発と可能の重なる部分は、以下の例のようなものが当てはまる。

(10) 私にはこの文章がどうも戦争論に読めた。(自発)

(11) 私には彼の汚い字が読めた。(可能)

ウ. 存在と自発の重なる部分は「浮かぶ」のような動詞である。もっとも、そこから普通の自動詞文との関連性も見出せる。存在文はモノの存在、出現、消失を指す。自発は自ずと何かが出来たことを表す。概念から考えても、両者がかなり重なっているのは明らかである。

エ. 存在と可能の重なる部分は「できる」のような動詞が当てはまる。

5. 存在論的「にーが」構文の文頭

5.1. 「にーが」構文と二重主語文の関係

尾上(1998)の第一種二重主語文：

①存在文：この本は誤植が全然ない。

②情意文：私は指先が冷たい。

③可能文¹：木村さんは中国語が話せる。

本研究の「にーが」構文は二重主語文と置き換えられる部分が非常に多い。ただし、置き換えられない部分も、置き換えにくい部分も少なくない。その部分を明らかにするため自発文と可能文の「には」文頭と「は」文頭について小範囲のアンケート調査を行った。配布した19部の質問票から16部の有効回答を回収した。

調査は回答者の語感によってAとBの使用頻度を判断してもらった。選択肢は7つある。

①Aしか使わない。②Aのほうが圧倒的に高い。③Aのほうが少し高い。④両者は大体同じ。⑤Bのほうが少し高い。⑥Bのほうが圧倒的に高い。⑦Bしか使わ

ない。結果は表1にまとめた。

5.2. なぜ「に(は)」か、なぜ「は」か

この節の論述を始める前に、まず「基本語順の場合、属性文と動作文は文頭に二格が来ない」ということを確認しておきたい事実がある。

典型的存在文は静的事実叙述文である。そして、存在文の二つの次元にそれぞれ属性文と動的事実叙述文があるわけである。結果から言うと、属性に近いほど、あるいは動作性が高いほど、その文は存在文に遠いと言える。つまり、同じ存在に関する「にーが」構文といっても、存在への係わり合いの度合いには大きな違いがあるのである。

上のアンケートの結果からもそのことは読み取れる。

- ① 全体から言うと、自発文は可能文より存在文に近い。
- ② 可能文でも、可能と実現した「意図成就」とは結果が異なる。「私は英語ができる」のような可能文は「私」の固有能力を述べるものであり、更なる考察が必要である点である。

6. 本研究の今後の課題

- ① 格助詞「に」についてさらに深い考察が必要である。
- ② 「にーが」構文の二次的構文について、更に詳しく考察しなければならない。
- ③ 文頭表現の本質は一体何か、深く考察する必要がある。

注

i 尾上(2004)は可能文を主として紹介し、自発、受身など多義な出来文を言及した。

参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」的と「なる」的言語学』大修館書店
- 尾上圭介(1997~1998)「文法を考える 1~4—主語(1)~(4)」『日本語学』16巻11号、12号、17巻1号、4号
- 尾上圭介(1998~1999)「文法を考える 5~7—出来文(1)~(3)」『日本語学』17巻7号、10号、18巻1号
- 尾上圭介・木村英樹・西村義樹(1998)「二重主語とその周辺——日中英対照」『言語』27巻11号
- 尾上圭介(2004)「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座 文法II』大修館書店
- 熊代敏行(2002)「日本語の「にーが」構文と分裂主語性」西村義樹編『認知言語学I：事象構造』東京大学出版会
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 森山新(2001)「認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・

ニの意味・用法の違い」 日本学報 49 韓国日本学会
 森山新（2004a）「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』 57
 森山新（2004b）「認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造について—認知言語学的観点から—」 『日本学報』 59
 Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive grammar*;

Standford
 Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter
 Langacker, Ronald W. (2001) Topic, subject, possessor, *A Cognitive Approach to the Verb*, Mouton de Gruyter

ちょう よう／北京日本学研究中心 博士課程 2 年
 zhaorong26@hotmail.com

表 1

文	1	2	3	4	5	6	7	理由
A: 私には.....が滑稽にも悲惨にも聞こえた。	6	6	1	3	0	0	0	A は自発; 動作性が低い; 存在文に近い
B: 私は.....が滑稽にも悲惨にも聞こえた。								
A: 私には富士山が見える。	5	2	2	6	1	0	0	A 自発・可能共に可; 視聴覚顕現存在文に近い
B: 私は富士山が見える。								
A: 私にはその文章がどうも戦争論に読めた。	3	3	4	6	0	0	0	自発: 存在変化文に近い
B: 私はその文章がどうも戦争論に読めた。								
A: 私には泣けた。	0	1	0	4	1	5	5	B 自発; 動作性が高い存在文により遠い
B: 私は泣けた。								
A: 私には英語ができる。	1	0	0	2	0	4	9	B 可能; 属性叙述である考えられる
B: 私は英語ができる。								
A: 私には彼の汚い字が読めた。	1	2	3	7	1	2	0	意図成就 [*] で、置き換えられやすい
B: 私は彼の汚い字が読めた。								

※尾上（1998-1999）を参照のこと。すでに実現したことについては潜在可能を問わないため、意図成就と呼ぶべきだと主張している。